

西川伸一の オススメシネマ⑱

MINAMATA —ミナマタ (米・2020)



一九七〇年、戦争取材などで著名な写真家のユージン・スミス（ジョニー・デップ）はすっかり落ちぶれていた。巨額の借金を抱え酒浸りの毎日だった。ただ、さえないユージンがロックミュージックに乗って登場するのはおもしろい。タイトルがもたらす心の緊張がほぐされる。そんな彼のもとに富士フィルムのCM出演の件で、アイリーン（美波）が通訳として訪ねてく

る。社長（國村隼）自らが、ユージンに水俣で撮影したフィルムすべてを高額で買い取ると持ちかける。彼の困窮ぶりを調べていたのだ。ユージンははねつけるが、のちに「ぐらっときた」と白状する。その後やはりというか、ユージンの仕事場が放火される。これまでの仕事が灰燼に帰ってしまった。失意のどん底のユージンは、『ライフ』の編集長にコレク

トコール（！）をかけて胸中を伝える。編集長はお前の写真に社運はかかっていると叱り飛ばす。アイリーンにも叱咤され、住民にも励まされてユージンは再びカメラを手にする。そしてチツソの株主総会の日を迎えた。ユージンはチツソ水俣工場の門前につめかけた住民たちといた。激しい抗議活動がやがて暴力沙汰へとエスカレートする。その渦中でユージンはチツソ側からひどい暴行を受け昏倒し入院する。ある青年が彼の病室に来て、さしたる説明もせずに茶封筒を置いて去る。そこには燃えたはずのフィルムが入っていたのだ。ユージンは俄然やる気を取り戻し、ついに「入浴する智子と母」の撮影にこぎつける。けがで手の自由がきかない彼の代わりにシャッターを切ったのはアイリーンだった。智子は胎児性水俣病で目が見えず自分で食べることもできない。この写真は水俣でのユージンの最高傑作で『ライフ』に掲載。編集長は「ついにやったな」と快哉を叫ぶ。ラストは熊本地裁判前で住民勝訴を彼らのリーダー（真田広之）が伝えるシーンである。もちろん水俣病はこれで終わったわけではない。エピソードには世界各地での公害被害者の写真が次々に映し出される。

実はユージンは沖繩戦で口蓋が碎ける重症を負って咀嚼が困難になっていた。作中ではしょっちゅうウイスキーをストレートであおっていた。さらにアンフェタミン（覚醒剤）も服用していた。映画『トランボ』（米・二〇一五年）で、トランボがアンフェタミンをウイスキーで飲み下して執筆するシーンを思い出した。

（二〇二二年一月二日・T.O.H.Oシネマズ府中）
（にしかわ・しんいち／明治大学教授）

る。これをきっかけに、アイリーンはユージンに興味を抱き水俣を取材しよう懇願する。沖繩戦の記憶から当初はしぶったユージンだが、持ち込まれた現地の写真に心を打たれて水俣行きを決意する。費用は『ライフ』の編集長に直談判した。経営難にあった『ライフ』はユージンの写真に賭けた。

ユージンはアイリーンと水俣で暮らし、暗室

を備えた仕事場も別に借りる。こうして現地の人びとの生活を写真に収めていく。事前に撮影の了解を得るのが礼儀だが、いきなり撮るのがユージンの流儀だ。この点をアイリーンに問われて「キスするのと同じだ」とユージンは答える。すると、アイリーンはユージンにいきなりキスする。このシーンがいい。